

9、練習の仕方（その1）

- 練習は、「回数多くくり返す」とか「長い時間をかける」だけではなかなか成果はあがりません。譜例-31を通することが多い人の中には、後半にさしかかったときに安定感とか安心感を感じなかった人がいるのではないのでしょうか？
1つの曲は終わりの部分から練習しておく、終わりに近づくほど安定感のあるひき方になります。また、難しいと感じた部分も、通してひく前に「先に練習しておく」ことが大切で、それに前の小節を付け足しながらくり返す練習は、大きな成果を得ることができます。
- 具体的に説明しておきましょう。
たとえば、譜例-32（譜例-31の7～8小節目）がうまくいかないとします。

譜例-32

*a)がないのは、指記号と紛らわしいからです。

たいていの人はこの2小節をはじめからくり返し練習しようと思いますが、それでは効率が良くありません。□でくくった6つの「2音b)~g)」のどの部分を難しいと感じるかを知ることが必要です。

おそらくe),f)のところがネックになって、なんとなくひき直しをしている人が少なくないでしょう。

そんなときは譜例-33-a,bのような「2音間の練習」を作って、10~20回くり返してみてください。ほんの数十秒の時間です。

譜例-33-a 譜例-33-b

注意：譜例-33-aは2指を1回ごとに離す。
譜例-33-bは2指を置いたまま、1指を1回ごとに離します。

*ひきづらさが左手にあっても右手にあっても、2音間の反復練習は大きな成果をあげるでしょう。

10、練習の仕方（その2）

- 楽譜を眺めることによって同じ音型のフレーズを見つけられるようになることは、異なる音型のフレーズ位置を確認することでもあり、練習の効率を良くすることになります。
「荒城の月」では冒頭の2小節音型がA~A"まで3回出てきますが、B部分の音型は1回だけなので、始めから通して練習するだけではB部分の練習回数が少ないことになります。

*コツは、異なる音型のフレーズを、回数多く練習しておくことです。

譜例-34

- ここでも、いきなり4小節を練習するのではなく、先に後半の2)部分を練習しておき、それに前の1)の2小節を付け足すと効率よく成果を上げられます。